

コガネヒカリ 700 kg/10a とりの期待生育量

(農試 果南分場)

1. 背景とゆらい

コガネヒカリは昭和57年に奨励品種採用後、近年の連続した異常気象下においても安定した多収性を示している。このため栽培面積の拡大が着しく昭和59年度は約6270 ha (作付比率8.2%)の作付があり、キヨニシキに次ぐ県下第5位の品種に成長し今後も栽培面積の拡大が見込まれる。

コガネヒカリの栽培法については、すでに昭和57年度指導上の参考事項に供しているが、栄養生理面での期待生育量については未検討であった。

本年はこの面から検討した結果 700 kg/10a 水準の安定多収が可能であり、その期待生育量について当面指標となり得る知見が得られたので指導上の参考に供する。

2. 技術内容

コガネヒカリの700 kg/10a 安定多収をあげる場合の収量構成要素と栄養条件を検討した結果は次のとおりである。

1) 700 kg/10a 収量水準の期待生育量

(1) 700 kg/10a 収量水準収量構成要素の期待値

項目	穂数 (本/m ²)	1穂粒数 (粒)	m ² 粒数 (×10 ³ 粒)	玄米 千粒重(g)	登熟歩合 (%)	稈長 (cm)
期待値	500 ~550	70 ~75	37 ~40	23.0 ~23.5	80 ~85	80 ~85

(2) 栄養的期待値

項目	生育時期		分けつ期 (6月下旬)	幼穂 形成期	減数 分裂期	出穂期	成熟期
	期待 値	窒素濃度 (%)	葉身	—	2.8 ~3.2	2.5 ~2.8	2.3 ~2.5
		莖葉	3.5 ~4.0	1.8 ~2.3	1.5 ~1.8	1.1 ~1.3	0.7 ~0.9
	乾物重 (g/m ²)		100 ~120	350 ~450	550 ~700	900 ~1100	1400 ~1500
	窒素吸 収量(%)		3.0 ~4.0	7.0 ~8.0	8.5 ~9.5	10 ~12	12.5 ~14.0

2) コガネヒカリの倒伏限界と幼穂形成期における追肥の要否

稈長85cm以下では倒伏の危険は少ない。幼穂形成期の葉身窒素濃度が約3.5%、窒素吸収量8~8.5 g/m²以上では倒伏の危険性があり追肥は中止又は遅らせる。また、この葉身窒素濃度と対応する葉色値はリラースケールでは概ね5.2~5.5、グリーンメーターでは1.4~1.45前後と推定された。

3) 栽培の要点

(1) 基肥量はトヨニシキ並~やや多目とし、生育量を十分確保する。追肥の重点時期は幼

穂形成期である。(昭57参考事項コガネヒカリの栽培法を参照)

(2) 分けつ期(6月下旬)の茎数は概ね600本/m²を下限とし、これを下回る生育量不足や、極端な葉色低下時には“つなぎ肥”等により生育量確保につとめる。

4) 適応地域

北上川中流(柴波以南)から北上川下流地帯及び東南部の平坦地を対象とする。

3. 指導上の留意事項

1) コガネヒカリは耐肥性に富み、特に地力の高い水田ではその特性が発揮できるので深耕と地力増強により後期栄養の維持確保に努める。

2) 稈質は強剛で耐倒伏性は強いが、倒伏は挫折型となるので追肥は稲体の栄養条件を充分考慮すること。

3) 残された問題点

(1) 地帯別品質向上技術の検討

(2) 栄養診断技術の精度向上と多収のための生育コントロール技術の検討

4. 参考文献・資料

1) 「水稻品種コガネヒカリの栽培法について」指導上の参考事項(昭57)

2) 「水稻品種コガネヒカリの栽培法」東北農業研究 Vol 33 (1983)

3) 「水稻に関する試験成績書」県南分場 (昭57~58)

5. 試験成績

昭和59年度試験研究成果等普及促進打合せ会資料参照のこと。